

## O1-001

## 新型コロナウイルス感染拡大下における乳児を育てる母親の育児ストレス状況とコーピング特性の縦断調査

三輪 桂子<sup>1</sup>、本田 育美<sup>2</sup>、宮崎 つた子<sup>3</sup><sup>1</sup> 名古屋学芸大学看護学部<sup>2</sup> 名古屋大学大学院医学系研究科総合保健学専攻<sup>3</sup> 三重県立看護大学

## 【背景】

新型コロナウイルス感染拡大により母親の取り巻く状況が大きく変化し、育児ストレスやコーピングに影響を与えた可能性がある。育児ストレスは児の成長発達に伴いストレス内容が変化するといわれているが、感染拡大の中で育児し続けることで新たに生じたストレスが、母親の育児ストレス状況やコーピングの経時的変化に如何なる影響を与えたのかは明らかでない。

## 【目的】

新型コロナウイルスの影響下における母親の育児ストレスとコーピングについて、児が生後3ヶ月(T1)、10ヶ月(T2)、1歳6ヶ月(T3)の縦断的变化を検討する。

## 【研究方法】

2020年1月～2021年12月に乳児をもつ母親に3時点で追跡調査を実施した。調査内容は基本属性、抑うつの評価、コーピング特性簡易評価尺度(BSCP)、育児ストレスインデックス(PSI)を用いた。多重比較を行いPSIとBSCPスコア変化の検討をした。本研究は三重県立看護大学の倫理審査委員会の承認を得て実施した。(承認番号:170420)

## 【結果】

対象者は3時点で回答に欠損がない母親122名。T1の母親の年代30～34歳48%、初産婦31%、抑うつ傾向13%であった。総育児ストレスはT1<T3、T2<T3、子の側面のストレスはT1<T3、T2<T3とスコアが有意に高くなったが、親の側面のストレスは有意な差はなかった。子の側面のストレス下位項目「子どもの機嫌の悪さ」はT1<T3、T2<T3、「子どもの気が散りやすい/多動」はT1<T2、T1<T3、T2<T3、「親につきまとう/人に慣れにくい」はT1<T2、T1<T3とスコアが有意に高くなり、一方「刺激に敏感に反応する」はT1>T3とスコアが有意に低くなった。親の側面のストレス下位項目では、「社会的孤立」「夫との関係」がT1<T3とスコアが有意に低くなった。BSCPスコアは「他者を巻き込んだ情動発散」がT1<T2であった。

## 【考察】

児が生後3ヶ月から1歳6ヶ月までの母親の育児ストレスは全体的に増加し、「刺激に敏感に反応する/ものに慣れにくい」のみ低下した。子の成長発達に伴ったストレスだけでなく、自粛生活で母親は家事や育児の負担増加を感じ、ストレスに影響した可能性もある。コーピング特性は「他者を巻き込んだ情動発散」を多く用いるように変化した。

## 【結論】

母親の総育児ストレス、子の側面のストレスは3ヶ月、10ヶ月、1歳6ヶ月においてスコアが有意に高くなった。母親のコーピング特性は児が3ヶ月よりも10ヶ月時点で「他者を巻き込んだ情動発散」のスコアが高くなった。

## O1-002

## 未就学児向け多様性への寛容さ尺度開発に向けた予備的研究

下山 結衣<sup>1</sup>、森崎 真由美<sup>2</sup>、池田 真理<sup>2</sup><sup>1</sup> 東京大学医学部健康総合科学科 看護科学専修  
家族看護学教室<sup>2</sup> 東京大学大学院医学系研究科 健康科学・看護学専攻  
家族看護学分野 グローバルナーシングリサーチセンター

## 【背景】

インクルーシブ保育の推進は日本の重要な課題である。インクルーシブ保育により障害のある子どもを受け入れる気持ちが育まれるとの報告があるが、個別の実践報告に留まり、介入効果は測定されていない。

## 【目的】

Acceptance Scale for Kindergarteners (ASK) や Chedoke-McMaster Attitudes Towards Children with Handicaps Scale (CATCH) を参考に、未就学児の多様性に対する寛容さを測る日本語版尺度を作成し、実施可能性・内容妥当性を確認する。

## 【方法】

ASKとCATCHを参考に項目プールを作成し、研究者間で議論を重ね暫定版質問紙を作成した。次に、機縁法で募集した保育実践者へ半構造化インタビューを実施し、暫定版質問紙への子どもの理解や現場の状況を尋ねた。発言をコード化し、研究者間の議論により質問紙を修正した。最後に、機縁法で募集した、保育園・幼稚園に通園している5,6歳の園児へ、質問紙への回答を含む認知的インタビューを行った。質問者が内容を読み、参加者が回答を記入した。発言のコード化や撮影した回答・インタビュー中の行動の分析を行い、尺度の妥当性を検証し、質問紙の修正点を挙げた。本研究は、東京大学大学院医学系研究科・医学部倫理委員会の承認を得た。

## 【結果】

5つの設定(視覚障害、聴覚障害、歩行困難、発達障害、見た目の違い)と、それぞれに対する4つの態度に関する質問を含む、20項目の質問紙を作成した。3名の保育士へのインタビューによって、イラストや回答方法、尺度の妥当性についての意見を得た。障害とは関係ない(転入生)の設定を追加し、24項目となった。10名の未就学児へ認知的インタビューを実施し、9名が質問紙への回答を完遂した。対象者の発言から【点字ブロックがわかる】と内容理解が確認された一方、顔にあるあざについては【顔に泥がついている】などと、誤解することが明らかになった。質問紙を読み上げている間、参加者はペープサートと質問紙に視線を向け、ペープサートを自身で動かしながら考えを伝える様子も見られた。行動分析から、「インタビューや質問紙に答えない」「姿勢が崩れる」などの、インタビューの中断につながる行動が抽出された。

## 【結論】

質問紙の内容理解と考えに基づいた回答は、5歳以上の未就学児にとって概ね可能だが、一部の文面やイラストの修正が必要である。加えて、今後は尺度の信頼性・妥当性、実施可能性の検証が必要である。